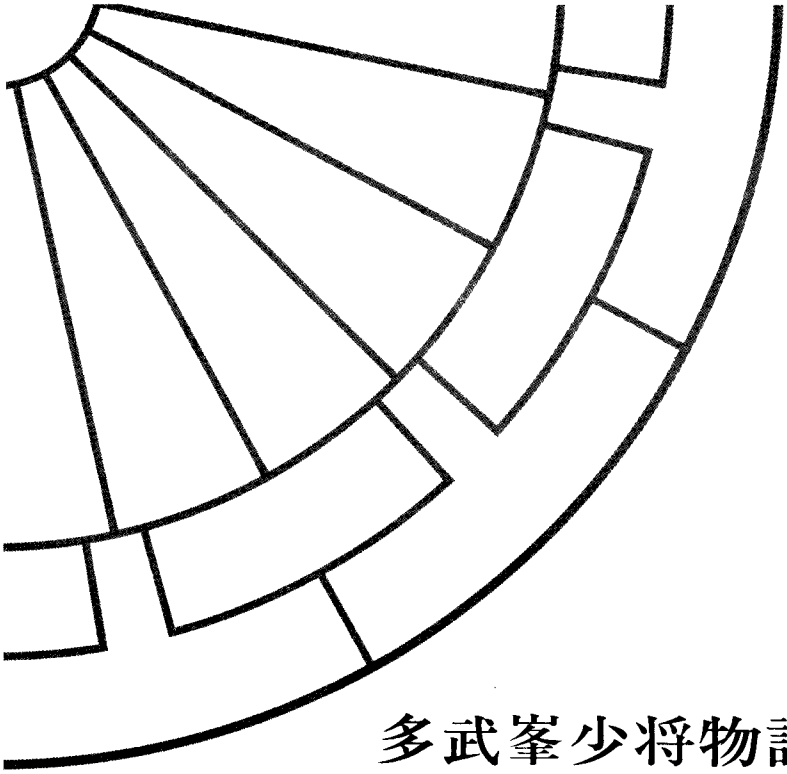

多武峯少将物語

本文及び総索引

小久保崇明編

笠間索引叢刊 *6*

本文篇

凡　例

一、本文は現存する『多武峯少将物語』の最善本である酒井家旧蔵本を中心として復原された、玉井幸助博士の『多武峯少将物語――本文批判と解釈――』に拠った。

二、底本に忠実ではあるが、読者の便宜をはかって、次のごとき配慮をした。

イ　適当に漢字を当てた。この場合、あて漢字にはルビを振った。なお、ルビの中に（　）で囲んだのがあるが、これは読みにくい漢字、あるいは読み誤りやすいと思ったものに、校者がつけたものである。

ロ　歴史的仮名遣によって訂正すべきものは、左記のごとく訂した。ただし、底本の仮名をその右に残した。

おりふし→をりふし（お）

ハ　送り仮名などを新しく加えた場合は、その右に・を付した。

さうじし給なるは→さうじし給ふなるは

ニ　底本が不適当であり、語を削る場合は、左記のごとく本文中に・を付し、その右に削った語を示し、加える時は、左記のごとく本文中にその語を補い、本文の右に・を付した。

おおむね、玉井博士の前掲書による。

みみたまへほしきに→見（みみ）・たまへ・まほしきに

ホ　底本の誤りと思われるものについては、左記のごとくこれを訂し、その右にもとの語を示す。

かぎりなくこなしきをり→かぎりなくこひしきをり

ヘ　反復記号はすべて用いないこととした。ただし、底本の姿をとどめるように、語の右にそれを示した。

ト　濁点は、校者の理解するところに従って施した。

チ　会話に属する部分は「　」で囲み、句読点も付した。おおむね、玉井博士の前掲書による。

リ　本文を段落に分け、それぞれに題を附した。これは、玉井博士の前掲書による。

従って、注記をたどれば、底本の姿に戻ることになる。

多武峯少将物語 本文及び総索引（本文篇）

目次

一 少将出家……七
二 女君と愛宮の贈答……一〇
三 桃園の権中納言殿の中将……一三
四 姉北の方……一三
五 愛宮の御許より……一三
六 ほととぎす……一四
七 三の宮より愛宮へ……一六
八 断　章……一七
九 右衛門佐愛宮を訪ふ……一八
一〇 あけの衣……一八
一一 鏡の影……一九
一二 うしほやくあま……二〇
一三 御精進……二一
一四 苔の衣……二三

一五　さらに京に出でじ……二四
一六　しのぶの草……二四
一七　早うより心かけたりし人……二六
一八　京の殿より……二七
一九　太刀はきたる姿……二八
二〇　宮のこのかみ……二九
二一　長歌贈答……三〇
二二　御はらからの君たち……三二
二三　富小路の君たち……三三
二四　父大殿の夢……三五
二五　父　君　か……三六
二六　新　少　将……三八
二七　白銀の花瓶……三九
二八　近江の北の方……四一
二九　綿物奉入……四三
三〇　ころもがは……四四
三一　湯かたびら……四五
三二　いみじくあはれになむ……四五

●編者紹介

小久保崇明（こくぼ たかあき）

，埼玉県に生まれる。
東京第一師範予科を経て東京学芸大学中等教育学科（国語専攻）卒業，日本大学大学院文学研究科修了。
現在，都留文科大学文学部助教授，国士館大学文学部・帝京大学文学部講師。
著書・論文：『大鏡の語法の研究』（桜楓社），『篁物語校本及び総索引』（笠間書院，笠間索引叢刊２），「春曙抄本枕草子『同じからずとどめむ』考」（「平安文学研究」29 輯），「大鏡の係り結びについて」（「文学・語学」第 35 号），「転換の接続詞，さて，そもそも，それ」（「月刊文法」２巻 12 号），「多武峯少将物語の成立時期について一語彙・語法をとおして一」（「語文」37 輯，秋葉安太郎博士記念号）

多武峯少将物語 本文及び総索引 ●笠間索引叢刊 *6*

昭和47年 8 月30日　初版発行©　　¥ 2,500

編者　小久保崇明

検印
省略

発行者　池田猛雄

発行所　有限会社**笠間書院**
〒１０１　東京都千代田区神田神保町1-46
電話 03-294-0996・0787　振替東京 56002

3381-852006-0924

科学図書印刷・手塚製本所